



# わたしの趣味

## — 東洋蘭 —

ひとの盆栽をみては素晴らしいと感じ、ひとの花づくりをみて美事と感じつつ、いつの間にか狭まい野菜畑が一層狭ばめられていく。こんな状態に落入るのが趣味を持つ者の傾向のようである。

私が東洋蘭に興味を持ったのは、4年前の秋、三越の展示場で、清涼の気を浴びて白一色の滋味深い花、濃線のつややかな葉の間から漂よう芳香にうたれたときからである。それは素心蘭であった。

草花は独自の美しさを持つが、一期間見るといふ目的を果たすと、意識には残ってもまた見るには翌年を待つほかなく、その間の草の姿は花に比して劣るのが多い。その点、東洋蘭は葉だけでも観賞に秀いでているものが多く、むしろ蕙蘭や日本春蘭には柄ものと称して神秘的な色あいのものが多い。蘭、梅、菊、竹を中国では四君子と定め、蘭をもって第1位に置き、徳を磨く意味を表しているようで、栽培してみるとその品格、清楚で優雅な花が昔から尊重されているわけがおのずとわかってくる。以下、私の短い期間の経験に基づいて、私の好きな蘭についてその作り方を記してみる。なお東洋蘭の栽培に関する多くの図書が出版されているので、それらを参考にして試みるのも、また自分にあった栽培技術を発見して栽培するのも趣味家としての醍醐味であろう。



〔種類〕 植物分類学上では洋ランのシンビジウムに属しているが、中国、台湾、日本などに産する中国春蘭、寒蘭、蕙蘭、雄蘭、雌蘭、素心蘭、金陵辺、玉花蘭、日本春蘭などを総称して東洋蘭という。上記のうち中国春蘭、雄蘭、素心蘭など主として花を楽しむものと、蕙蘭、金陵辺、一部

の日本春蘭など葉柄の変化をめぐる種類がある。その人の好みによって愛培されている。

○素心蘭 台湾、中国に産し花が一色一素というところから素心の名があり一茎多花。殆んどが秋季に芳香ある花を咲かせる。丈夫でよく増える。用土は、鉢物全てにいえるが水はけの良い土、岡山砂、硬質鹿沼土、クレイボール、赤玉土の混用。また、一部に試験的に糞殻と糞殻のくん炭化したものを単用してみたが良い成績を得ている。移植時期は春秋彼岸前後が好適期である。石溪素心、観音素心、十八学士、雲華素心など値段も手ごろである。

○蕙蘭 台湾の高地及び中国が主産地で、日本に渡ってから数多くの名品を作出された。花より葉の変化を観賞する蘭なので採光に栽培のポイントがある。縞や覆輪などが主で強い日光は葉焼けの原因になるからである。用土は蕙蘭には岡山砂が定説になっているようだが、市販されている蘭専用の用土が手ごろであろう。金鳳錦、瑞玉、瑞宝、大勲、愛国、天司晃などの品種は作り易い。

○中国春蘭 名のとおり中国産で花の清楚さと芳香が楽しみな蘭で、大衆的な人気がある。採光は、年間を通じて直射日光は必要ない。用土は前述の3～4種類をまぜて使う。竜字、翠一品、春一品、老十円などが価格もわりあい安すく入手し易い品種である。

私は庭先に1m位の素掘りビニールの室をつくり、冬季はヒヨコ電球を入れ、凍らせない程度の設備で十分发育させている。東洋蘭は病虫害にも強く、わりと作り易いものである。水のかけかた、肥料のやりかたなどは割愛した。

( 坏 )

## 迷解植物辞典 (第6回)

### 【め ～ よ】

**めまつ** (雌松・女松) ……〔原義〕赤松のこと。まつ科の常緑きょう木。山野にはえ、木の皮は赤色。木材は建築用。

〔派生〕赤松の根に寄生するのが松茸である。7月の新聞には、長野産の松茸がデパートに並んだと報道されている。値段はなんと100g 10,000円。10本のつめ合せて、65,000円だそう。中元用らしいが、一体どんな人がもらうのだろう。

われわれがもらえるのは、よくても〇〇園の松茸のお吸物である。お湯を入れれば、松茸の切れはしにお目にかかれる。

**もも** (桃) ……〔原義〕いばら科の落葉小きょう木。4月、とき色・白色の花を開く。実は食用、種子は薬用となる。

〔派生1〕「桃源郷」というと、俗世をはなれた別世界のこと。晋の陶淵明(365～427)の「桃花源記」によるものだが、どこかの国と違って非常に住みやすい所とか。

この「桃源郷」という所、もとは川の上流にあったらしいが、現代ではバーやキャバレーにも進出しているとか聞く。

〔派生2〕中国では、桃は長命の象徴である。特に夏至の日には、桃の木を門口にさしておけば「桃印」といって邪気を払うという。

また、道教や仏教のお札に押し印も、桃の木で刻むと非常に効験があるともいう。

お宅のお札はどうですか。

**やなぎ** (柳) ……〔原義〕やなぎ科の植物の総称。落葉きょう木で、穂のような花をたれる。主として、しだれやなぎのことをいう。

〔派生〕柳の木の下といえ、どじょうが二匹か幽霊を思い浮べる。毎年むし暑い季節になると、決まって幽霊の話がでる。特に最近ではUFOだとか、心霊だとか、はたまた超能力だとか騒いでいる。

だいたい幽霊には「足がない」。昔の幽霊には足があ

ったのだが、足のない幽霊を描いた円山応挙作の掛物が評判になり、それ以後幽霊といえ足がないことになったという。足をとられた方こそ災難である。

**ゆり** (百合) ……〔原義〕ゆり科の多年草。山野に生じ、葉はささに似る。夏につりがね形で白色・黄赤色などの花を開く。地下の茎は食用。

〔派生〕「立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花」というとおり、すらしとしたその容姿は美しいもののたとえに使われる。

ところが「百合」というのは、「パイホ」と発音して中国のハカタユリのことを言う。日本古来の方は、「由理」と書いて、これはササユリのことを指している。だから、「百合の花」ととえるのは中国美人の場合で、日本的な美人の場合には「由理の花」と書くのが正しいということになるだろうか。もっとも現在では、「百合」の方が通用しているようである。

ふとっている人をたとえる時には、「立てば電柱座ればたらい、歩く姿はドラムカン」というのを使う。

**よもぎ** (蓬) ……〔原義〕きく科の多年草。山野に生じ、葉の下面は毛が生えて灰白色。夏秋のころ、小粒の花を開く。葉は食用・漢方薬用。「蓬生」は草深い土地のこと。

〔派生〕源氏物語「蓬生」の巻は、光源氏が朝廷の勢力争いから須磨に退去している間、寄るべもなく困窮し、広大な廃邸に埋もれて彼の帰還の日を待ち続けた末摘花の生活を描いており、さきの「末摘花」の巻の後日譚としての性格を持つ巻である。

末摘花という女性は、気のきかないまれにみる醜女である。夕顔と光源氏との悲恋の直後に現われてくるだけに一層目立つ。それでも「蓬生」の巻で、結局はハッピーエンドに終る。

自分が「気のきかないまれにみる醜女」だと思っているあなた、待っていればいつかは救ってくれる人がいると、紫式部が言っている。(伊藤)